

今年度の理学同窓会(瑞滝会)奨学生の紹介

瑞滝会奨学生として選出いただきました、学部3年生の鈴木涼月です。

瑞滝会の皆様へ、奨学生への選出、及び、日頃の学習サポートについて、心からお礼申し上げます。

総合生命理学部へ入学して約3年が経ちました。3年生後期からは研究室にも配属され、ようやくサイエンスの世界に足を踏み入れたと感じ、また、研究室での活動を通じて自分自身がアップデートしていることを感じる日々を送っています。特に、学生であると同時に、一人の研究に携わる者として先生やラボメンバーと議論できることに、強い喜びと、抑えがたい興奮を抱いています。

1、2年生で学習したことや考えたこと、経験の全てが今、研究室という、いわば「現場」で生きてきています。これまで欲張った学生生活を送れたからこそ、現在のようなクリエイティブな経験ができていたのだと実感します。今後とも、自分自身に蓋をせず、興味にしたがって動き、一層の勉学に励んでいきたい所存です。

学部学生として過ごせる時間も残り1年と、わずかなものになりますが、自分自身に妥協せず、駆けていきたいです。

最後に、瑞滝会の皆様へ、この場を借りてもう一度、心からの感謝を申し上げます。

すずき りょうが
学部3年 鈴木 涼月

瑞滝会奨学生として選んでいただけたことを、心から感謝いたします。

好奇心を輝かせてくれる理学という学問を学べる日々、ギターマンドリンクラブに所属するなど、自分のやりたいことに取り組める日々——それは、あたりまえに享受できる日常ではないと思います。このような環境に身を置けることへの幸せを感じながら、悔いのない大学生活を送れるよう、より一層努力します。

この総合生命理学部で、広く理学を学ぶことによって思考力を鍛え、自らの抱いた“なぜ?”という疑問に、きちんと向き合うために必要な素養を身につけたいとの強い思いがあります。目の前の疑問や課題に対して、多面的な視点から見るができるよう、そして多様なアプローチを考え行動に移せるように、今後とも決意をもって勉学に励みます。

最後になりましたが、瑞滝会の皆様はこの場を借りてお礼申し上げます。

はやし まゆこ
学部2年 林 万柚子

理学同窓会(瑞滝会) 同窓会奨学生の募集

瑞滝会では学業優秀で学内行事等にも積極的に活動をしている総合生命理学部生(対象は2年生~4年生の各一名ずつ)に同窓会奨学金として、10万円を贈呈します。

申し込み用紙をホームページからダウンロードして申し込んでください。

申込期間は令和3年4月15日から5月31日までで、書類を指導教員(担任)に提出してください。

*一度選定された方は応募できません。
*成績、その他の評価は前年度が対象となります。

名古屋市立大学 交流会入会の案内

皆さん、名古屋市立大学交流会に入会していますか。学部単位と同窓会に加えて、卒業生、修了生、大学現旧教職員、本学にゆかりのある方を含めた全学レベルの組織を設立し、大学の発展と社会への貢献を図ることを目的として、平成25年3月「名古屋市立大学交流会」が設立されました。入会方法は「名古屋市立大学交流会」で検索し、入会案内に従いお名前やご住所を記入、返信するだけです。是非、ご入会ください。

瑞滝会総会のお知らせ

瑞滝会では昨今の事情を鑑みて、毎年6月に開催している同窓会総会は、今年度と同様にオンラインによる採択となりました。また、それに伴い今年度の同窓会懇親会は中止となりました。

開学70周年記念事業について

名古屋市立大学は2020年、開学70周年を迎えました。今年度は開学70周年記念行事といたしまして、学生会館のリニューアルとオープニングセレモニーが行われました。

また、学生会館等の新たな名称・愛称が発表され、学生会館は「山の畑会館」、生協食堂は「ソテツ食堂」、新設された同窓会ゾーンは「IvyRoom(アイビールーム)」となりました。

70周年記念事業につきましては、2021年も引き続き行われる予定です。詳しくは「市大開学70周年」で検索できます。一度、ホームページをご覧ください。

編集後記

「コロナ禍」と呼ばれるようになってから1年が経とうとしています。様々な情報が飛び交い、何が正しい情報なのか見極める力が今まで以上に必要になってきました。我々は理学を志すものとして、正しい知識と知恵を身に付けて「新たな日常」に馴染んでいけたらと思います。(山本)



(左)リニューアルされた学生会館「山の畑会館」
(右)新設された同窓会ゾーン「IvyRoom」

名古屋市立大学 理学同窓会

瑞滝会 会報誌 2021 March



同窓会会長からの挨拶

瑞滝会会員の皆様、この一年間いかがお過ごしでしたでしょうか。仕事のみならず、さまざまな生活のスタイルが一変した年だったかと思います。私たちの同窓会も総会決議はオンライン投票で行い、懇親会を中止としました。なお総会の場をお借りし、開学70周年事業寄付金のお願いを申し上げる予定でしたが、その機会を逃してしまいました。寄付は2021年3月末日まで受け付けています。皆様のご支援を改めましてお願い申し上げます。

新型コロナウイルスのワクチン予防接種がようやく始まろうとしています。今後どのように感染状況が変化していくのかは予断を許しません。気兼ねすることなく“三密”で、会員諸氏と歓談できる日を心待ちにしています。その時までには気を引き締めて、皆様が健康で過ごせることを切に願っています。



名古屋市立大学 瑞滝会 会長

對馬 明
役員 一同

オンラインオープンキャンパスを開催して

総合生命理学部を2018年に設置するにあたり、その1年前の2017年7月に、本局初となるオープンキャンパス（以下、OC）が開催された。私は、初開催から現在に至るまでOC企画を担当させて頂いている。同窓会報への寄稿を依頼されたこの機会に、これまでのOCを振り返ってみた。

初OCは手探り状態での企画だった。学部ができるとは言え、新学部棟があるわけなし。どこでやるのか、なにをやるのか。開催案がまとまらず、開催直前の教授会で決議して頂く事態に。「こんな直前に実施方法を変更するなんて、ぼくなら怖くてできませんよ」と某先生に言われたことが印象に残っている。

その後、少しずつ修正を加え、今のスタイルが成立した。参加者アンケートも毎回好評である。改善の余地はあろうが、安定期に入ったと言ってよいだろう。そろそろ担当をどなたかに交代して頂き、新しいOCの形を模索してもよいのでは、と考えていた矢先である。コロナが直撃したのだ。

これにより対面実施を見直さざるを得なくなった。オンラインでの開催可能性、その実施案。またゼロからの検討である。幸いだったのは、本学においてZoomによるオンライン講義が実施されており、300名までの会議が開催可能な有料アカウントを利用できたことだ。なんとか実施案をまとめ、開催にこぎつけた。参加者数は、夏は午前・午後の部合わせて約70名、秋は午後のみで約15名であった。例年の対面開催と比べ、遥かに少なかった。オンライン開催の判断が遅れ、広報が後手になったことが原因かもしれない。それでも、インターネット中継によるOCは全国的にも珍しかったのか、東海テレビと朝日新聞に取材して頂いた。

初OCから4年。オンライン開催は、固定化していた実施内容に新しい風を吹き込むきっかけになった。来年度に対面で実施できるかどうかはわからないが、本学部ならではのOCを模索していければと思う。

みうら ひとし
オープンキャンパス担当 **三浦 均** 准教授

コロナ禍で入学した学生を担当し日々を振り返り

学部創設3年目の今年は、4月に51名の新生を迎えました。しかし、年明けから流行りはじめたコロナウイルスの影響で入学式をはじめとする行事が軒並み中止になり、新生の大学生活は残念ながら先が見えない状態でのスタートとなりました。学部の新生ガイダンスは開催できませんでしたが、感染防止のために互いに話す機会がなく、親交を温める場にはならなかったはず。そんな中、新生が同級生や教員を知る良い機会になったのが、上級生が企画してくれたオンライン新歓でした。モニター越しでしたが互いの顔を見て話すことができ、非常に良い歓迎会だったと思います。

新生が入学直後に将来を見据えて行う作業が履修登録ですが、初めてのことでガイダンスで受けた説明だけでは正しく登録できない人もおり、担任としての最初の仕事はその対応でした。ただ、学生との連絡手段がLINEを通じてのやり取りでしたので、老眼の私には大変な作業でした（スマホで文章を打つだけです）。4月下旬になりようやく講義が始まりましたが、遠隔や課題形式で行われたため新生は大学に登校する事がなく、現実とは思っていた学生生活とはかけ離れたものだったと思います。その中で自らが置かれた状況に疑問を抱き、将来について考え直す人も少なくなかったようです。悩んでいた数名とは話をしましたが、私自身の考えを伝えただけで大したアドバイスはできず、若い人たちの将来を左右しかねない相談にのることの難しさを、改めて痛感した次第です。

感染者が減り始めた6月初旬になって対面授業が開始されましたが、冬場を迎えて再び感染者が増えはじめ、12月に入ってから増加の一途を辿っています。この先どうなるか読めませんが、1日も早くコロナ禍が収束し、今年入学した学生達がこの経験について笑って話す日が来ることを願うばかりです。

きどう しんいちろう
三期生担任 **木藤 新一郎** 教授



(上)学部生トークライブの様子
(中央)説明会の様子
(下)オンライン研究室見学の様子

学部生からの便り

研究室配属について



3年の後期になり研究室に配属されました。学部生の配属は初めてのことで、卒業研究までの具体的な過程がわからず不安でした。

配属先の奥津研究室では学部生は私だけで、先生だけでなく研究員の方や博士課程の方からも手取り足取り研究の楽しさを教えてもらっています。具体的には、自分の興味のある分野の論文を読んでどんな研究に生かせるかを先生とディスカッションを行ったり、奥津研究室独自の手順でのタンパク質濃度の測定、遺伝子組換えマウスのジェノタイピングやウエスタンブロットなど研究の基礎となる実験をしたり、自分のペースで進めることができます。

奥津研究室では、研究員の方も博士課程の方も奥津先生と対等な関係でディスカッションや研究を行っています。また、奥津先生は毎日進行状況を確認してくださるので、とても質問しやすい環境が整っていると感じています。

将来的には、より多くの知識や経験を積んで、研究室の一員として活躍の場を広げていきたいです。

やまざき あみ
学部3年 **山崎 杏実**

理学の熱波



コロナ禍での入学式、コロナ禍での授業、コロナ禍での大学生活。たまったもんじゃねえ。ぴえん。

なんてことを入学当初の私は考えていましたが、今の私は大学で新しくできた友人と共に学んだり、遊んだり、サウナで汗を流したり。なんだかんだで充実した日々を送っています。

サウナといえば、サウナ業界には、「ととのう」という言葉があります。じりじりとしたサウナの熱気に限界まで耐えたあと、キンキンに冷えた水風呂に着水し、数十秒。その後水風呂を上がって外気に触れると、深いリラックス感と高揚感を得ることができます。これが「ととのう」と呼ばれる現象です。次に「理学」の視点から「ととのう」を解説しましょう。人間が熱さと寒さの極限状態から解放された時、体内は副交感神経が働いていながら、血中にはアドレナリンという興奮物が多く存在している状況になります。このとき、体はリラックスしていながら脳は覚醒しており、深い集中状態にあります。これが「ととのう」と呼ばれる現象です。

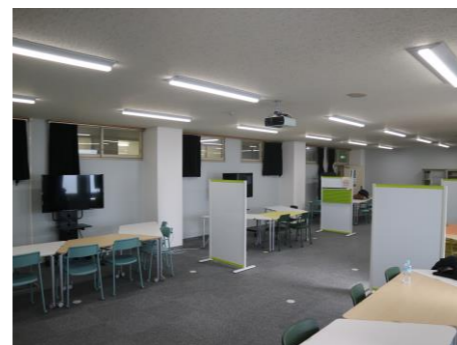
理学とは物事の本質を探究する学問です。本質を知ったとき、もしくは知ろうと努力したとき、それは「学び」になります。「学び」を得たとき何にも例え難い満足感、「ととのう」ときの感覚に似ています。私はこれからも、「学び」によって充実した大学生活を送って行きたいです。

なるせ たいち
学部1年 **成瀬 泰地**

4・5号館の改修が行われました

4号館4階に「ラーニングコモンズ」、3,4階に「学部生室」が新設され、また、5号館1階の「化学実験室」の改修が行われました。

ラーニングコモンズや学部生室は、授業や研究のほかにも自習や学生同士の勉強会などに使用されています。



(左)ラーニングコモンズ (中央)学部生室 (右)改装された化学実験室